人間性と人間の生活に根をおろした幼児教育を

——幼児教育第二世紀を迎えて——

高橋　さやか

もともと子どもの教育は、人間が人間であり、また人間となるために、人間が人間としての生活を営む、そのいとなみの維持と継承のために、——ためにというよりも継承それ自体にほかならないいとなみとして、なされるはずのものである。

「幼児教育第二世紀を迎えて」ということは、この国で、教育制度としての幼児教育、即ち、この国最初の国立の幼稚園が設立されてから百年をすぎ、百一年を迎えた、ということからいわれるようであるが、従って、顧慮することの第一は、人間本来のいとなみが制度化された歩みの中で、どのような経過をたどり、どのような発展をしたか、そして、さらにどのような指向にもとづいて今後の歩みをもたなければならないのか、ということであろう。

制度というものは、この国では、ともすれば形骸化して内容を失う場合がかなりにしばしばである。教育制度はとりわけて、といえば過言になるであろうか。教育制度の中でも幼児教育の制度はことさらに、といえば、幼児教育を専門とする人間の末端に連なるものにもあるまじき言をなすもの、といわれるであろうか。

限られたスペースでは、結論だけを性急にのべることになるようであるが、筆者は、教育の問題が、日本的な、形式的にあまりにも整然と規格づけられた、そして、その規格が、最低規準は常に事実上の最高規準となり、基本的な意義は無視されて末端的な数字合わせ、書式合わせだけを重視した、——表向きの整然と内実の悪い意味での融通自在とが、まことに平然と同居している状況で、「隆盛」であることに対して、深い憤りを抱く者である。

経済機構が複雑に発達した「文明社会」の中で、社会組織が様々の制度をもつことは結構である。しかし、制度は、人間の

いとなみをその本来の必要に基づいて円滑にするためのものであって、人間のいとなみを規制し、さらには歪曲するようでは、意味をなさないばかりでなく、悪そのものである。

幸か不幸か、幼児教育の制度は、いささか混沌としている。幼保二元が一応の形であるけれども、一元化問題が幼児教育の根元にふれるものとして専門家の間で重たく意識されていることはすでに久しい。事実上の一元的な教（保）育施設の試みも、意欲的な識者によって、或いは、事業家的な着目からも、全国的にいくつか行なわれている。

幼保の問題は、たしかに本質的に微妙である、……というのは、人間のいとなみの本来のあり方からいえば、保育は広義の教育に当然包括されるいとなみである。ところが、制度上の問題としてならば、幼児教育は、むしろ保育の側に包括される方が合理的であると考えられる。何故なら、教育制度を考えるとき、どうしても、綜合的な生活全般にわたる発想よりも、分野別の、生活全般の中から特に抽出され、分離された「教育の面」に即した発想になることは、ある程度避けられないことであろう。しかし、乳幼児期の教育は、「教育の面」だけを生活全般の中から抽出分離して行なうことは、極めて不自然ないとなみなのである。

乳幼児の教育にかかわる以上、文部省、厚生省は、セクトにかかわらず、強力な相互乗り入れ体制をとるべきである。人間の乳幼児期というものは、生活と教育とを分離することができない時期だからである。

正直な気持ちとして、第二世紀に入った、とか、新しいあけぼのを望んで、とかいった、さわやかな、積極的なものをもち難いのである。

文部省と厚生省が強力に保育・幼児教育に関して相互乗り入れをする、といったことも絶望的である。

私立の幼稚園、保育園の経営者に、保育業者であってはならない、といっても無駄のように思われる。

父親に、月に二回か三回、本気で子どもと遊ぶことを考えてもらいたい、といっても、母親に、目先きのことでなく、自分の虚栄心の満足ばかりでなく、一人ひとりの子ども本人の全人格を考える教育を、とよびかけても、その意味は通じないのではないか。

保育者養成機関には、保育の専門家が稀にしかかかわっていない。たまにかかわっていても研究の機会が乏しいのに加えて、養成機関内での処遇や発言力は認められない場合が多い。幼児教育・保育ほど現場と理論（研究）が密着していなければ

ならない専門職も少ないのに、まるで当然のように、現場は現場、理論は理論と、てんでんばらばらである。

もちろん、よい方の例外は皆無ではない。

むしろ、普遍的な実情が低迷しつづけているために、よい方の例外はそれなりに力強い働きをしている、ということも言えるかもしれない。官僚の中にも「型破り」といわれる先覚者は存在しないわけでもなかろうし、業者でない教育者が尽瘁されている園もあるであろう。本当の意味でのよい父親も、よい母親もまだまだ絶え果てたわけではあるまい。養成機関も、……さあ、保育者養成機関が（筆者自身も所属しているが）一番大きな問題をかかえているのかもしれない。

ということは、やはり、子どもとは何か、人間とは何か、教育、特にその基盤はどのように据えなければならないのか、という理論が、未だ確かなものとなっていない、ということにほかならないのだと考える。

保育者養成機関がしっかりした研究機関の性格と機能を具え、かつ、誠実に行き届いた子どもの生活の場としての保育・幼児教育の現場を附属施設としてもっていないことは、致命的であると考えずにはいられない。

「第二世紀に入った」幼児教育は、篤志の個人、例外的な特殊な専門家の、熱烈ではあるが、片隅のささやかな一般に理解されない孤独ないとなみ、ではなく、確乎とした社会制度として、人間の社会生活の中にしたたかに根をはった、それ自身社会生活を支えるものであるところの、――そのような位置を占めるものでなければならないと思う。そのためには、直接の保育担当者も、当然その養成機関も、よい加減ではない専門職としての自覚（意識）と、職能とを、性格と機能とをもたなければならない。

明治初期から、日本の保育は欧米の先進的な成果に、それほど距離をおかないでそれを追及し、受容してきたと言えるようである。「最初の幼稚園」東京女子師範附属幼稚園のあり方を見ても、頌栄（現在の短期大学）を初めとするキリスト教系の保母養成と幼稚園のあり方を見ても、その保育内容の水準は、決して低いものではなかった。普及率こそ高いとはいえなかったかわり、明治中期以後、大正・昭和初期の――一九三〇年代までの日本の保育は、恐らく、今日よりも優れていた、といえるのではないだろうか。普及率が低かった代り、専門性は今日よりも明らかに高かった。公私を問わず、保育・幼児教育を、功利的な意味での事業と考える人間はまだ多くはなかった。

一世紀たってみて、保育事業・幼児教育事業はまことに隆

盛、なかなかのご繁昌である。専門家のいない保育者養成機関の普及も大へんなもので、その養成機関がまた、定員の二倍を軽く越えて入学者をうけ入れ、スペシャリストには程遠い「保育者」を大量に送り出している。

繁栄の中の貧困、ということばを聞くが、幼児教育のあり様も、その最たるものではないか。

障害児教育に献身している活動家が、「差別」と戦う道の嶮しさを強調しておられた。保育・幼児教育に携わる者としては、「無理解」との戦いの嶮しさを訴えたい。

真実な歩みは断絶してしまったわけではない。

多くはなくても、保育の本当のスペシャリストはこの国にも存在している。ただ、そのスペシャリストも、時に、研究と実践とのそれぞれの立場を分け持って、相互の連繋を失いがちであることは、否定し難いうらみがある。形骸化されない制度の確立が、改めて指向されなければならないと思う。

実践を支え発展させる研究、研究を発展させ確立させる実践が、社会機構の中に、生活体制の中に、動かし難く根を下して定着するものでなければならないと思う。

その希望はもてるのであろうか。

フレーベルは、すでに、生活学習の上に遊びが成立することを熟知していた。個別的な機能訓練と集団の共同において教育がいとなまれなければならないことを指摘し、労働作業の意義も明示していた。多分に観念的な限界をもっていたことは否定できないが、今日の集団主義教育の前駆をなす考え方がフレーベルにあったことは、ソ連の教育学界に於ても、プラグマティズムの教育哲学よりはフレーベルの人間教育の所説に、批判は加えながらも見るべきものを認めていることからも、そのようにうけとめてよいことであると思う。

人間のいとなみは、できるだけ正当にうけ継がれ、かつ伝達されなければならない。絶望することは許されないであろう。

第二世紀を迎えて、といっても、事態は決して明るいとはいえないのは事実である。物質文明の異常な発展は、人間性を人間自身の手で侵蝕しはじめた。教育マシーンのセールスも盛んであり、オートミズムは子どもたちの間に潜在的に進行している。人間性と人間生活に根を下した幼児教育をとり戻し確立することができなかったら、人間は「生きること」それ自体から脱落してしまうのではないかと考えざるを得ない。

（西南女学院短期大学）